

【指定テーマ2：神戸港・大阪港開港150年】

《研究ノート》

神戸開港150年記念事業を終えて －神戸港のさらなる発展に向けて－

出口 幸 治
(神戸市みなと総局)

目 次

1. 神戸開港150年記念事業の基本方針・基本計画
2. 神戸開港150年記念事業の基幹事業
3. 神戸開港150年記念事業を通じて

1. 神戸開港150年記念事業の基本方針・基本計画

神戸港は自然条件に優れた天然の良港として、古くは奈良・平安の時代から、中国大陸や朝鮮半島との交流拠点として繁栄し、国内でも東西の海上交通の要衝として栄えてきました。幕末の動乱から鎖国政策が終わり、海外に対して国を開いた1868年の開港後は、神戸のまちは諸外国との交流を重ねつつ、開放的で創造性に富んだ独自の神戸文化を培ってきました。神戸の人たちは、港から入ってくるコーヒーやスイーツなどの食文化、ゴルフ、サッカー、マラソン、ボーリングなどのスポーツ、洋服や映画、水族館など、様々な文物を受け入れ、神戸独自の生活文化に昇華させ、それらはやがて日本全国に広まってきました。

今から50年前の開港100年時には、ポートアイランドをはじめとする海と山の産業団地・住宅団地の整備や、日本初のコンテナ物流が始められ、神戸港は世界を代表する国際貿易港へと発展し、わが国の国民生活や産業基盤を支えてきました。

1995年1月に発生した阪神・淡路大震災により、神戸港も神戸のまちも甚大な被害を受けましたが、国内外から力強い支援をいただき、今日まで復興の歩みを進めてきました。耐震性をそなえた大水深コンテナバースの整備や国際コンテナ戦略港湾政策の推進など、ハード、ソフトにわたる港勢拡大に向けた取り組みを進めた結果、コンテナ取扱量は震災前の水準まで戻りつつあります。

その神戸港は、2017年、開港から150年目を迎えました。この記念すべき年を、市民・企業・行政がともに祝い、次世代に向けこれからの神戸の未来をともに作りあげていくため、神戸港での多彩な行事や、港勢拡大につながる事業を実施し、神戸の原点である神戸港のこれまでの振り返り、さらなる発展に繋げるため、2017年1月から12月を会期として、「神戸開港150年記念事業」を開催してきました。

表1 神戸港の歩み

弘仁3年	812年	大輪田泊（現兵庫ふ頭周辺）修築
治承4年	1180年	平清盛 福原京遷都
応永4年	1397年	足利義満 第1回遣明船出航、兵庫が対明貿易の拠点となる
寛政11年	1799年	高田屋嘉兵衛 択捉航路開く、兵庫が北海道物産の交易基地となる
元治1年	1864年	勝海舟の建言により神戸海軍操練所開設
慶応3年	1868年	神戸港開港（「兵庫」として開港）
明治7年	1874年	鈴木商店開業
明治11年	1878年	兵庫商法会議所（現神戸商工会議所）設立
明治14年	1881年	川崎正蔵 川崎兵庫造船所を開設
明治38年	1905年	神戸三菱造船所を開設 鈴木商店の神戸製鋼所を開設
明治41年	1908年	ブラジル移民第1船「笠戸丸」が出航
大正7年	1918年	川崎芳太郎、川崎商船学校開校（現神戸大学海事科学部）
昭和20年	1945年	終戦 連合国が神戸港の主要港湾施設を接收
昭和26年	1951年	神戸市が港湾管理者となる
昭和27年	1952年	第1回国際港湾会議（現IAPHの前身）を神戸で開催
昭和34年	1959年	全港湾施設の接收解除
昭和41年	1966年	ポートアイランド着工（昭和56年竣工）
昭和42年	1967年	神戸開港100年祭記念式典 コンテナ船初入港（ハワイアンプランター号）
昭和56年	1981年	ポートアイランド完成を記念して「ポートピア'81」開催
昭和62年	1987年	メリケンパークオープン 海洋博物館開業（神戸開港120年記念式典）
平成7年	1995年	阪神・淡路大震災発生
平成8年	1996年	日本初の大水深高規格コンテナバースPC-14、15共用開始
平成9年	1997年	震災復旧完了（神戸開港130年記念式典）
平成18年	2006年	神戸空港開港
平成19年	2007年	大阪湾諸港の一開港化（阪神港）
平成22年	2010年	阪神港が「国際コンテナ戦略港湾」として選定
平成26年	2014年	日本初の港湾運営会社「阪神国際港湾株式会社」設立
平成29年	2017年	神戸開港150年 様々な記念事業を展開

神戸開港150年記念事業は、表2に掲げる基本方針・基本計画に基づいて、企業・市民・行政が一体となって進めていくことに主眼を置いてきました。「みなとの機能」、「みなとの魅力」、「みなとと市民との繋がり」の強化を軸に、港の設備増強や国際コンテナ戦略港湾施策の推進による港勢拡大、ウォーターフロントエリアの再開発、港への集客を図る様々なイベントにより、神戸開港150年の1年が、神戸港、そして神戸の未来を、企業・市民・行政がともに創造していく契機となることを目指しました。

表2 神戸開港150年記念事業の基本方針・基本計画

(1) 歴史の振り返りとさらなる発展へのスタート
開港以来神戸のまちとともに繁栄してきた港の歴史を振り返るとともに、輝ける未来創造都市の実現に向けた港の将来像を考え、神戸港のさらなる発展への新たなスタートを切る。
(2) 活力と魅力があふれる「みなと」の創造
西日本の産業と国際物流を支えるゲートポートとして、神戸港の国際競争力向上を目指すとともに、空港をもつ港である強みを活かし、海と空の「みなと」の相乗効果により活力と魅力があふれる「みなと」を創造する。
(3) ウォーターフロントの賑わい創出
客船の誘致や、後世に残るものの整備に加え、神戸港の発展を支えてきた新港西地区の再開発を進め、ハーバーランド、メリケンパークも含めたウォーターフロントに賑わいを創出することにより、港を市民にとって身近な存在とし、人で賑わう神戸港を実現する。
(4) 国内外への情報発信と国際交流
国際港湾都市神戸を海外も含めて広く内外にPRするとともに、神戸のより一層のイメージアップを図る機会とする。さらに、この記念事業を通じて、世界の人々が集い市民とともにお互いにコミュニケーションの輪を広げられる催しとする。
(5) 未来を担う人材の参画
将来を担う子どもたちに海・船・港に触れる機会を数多く設け、将来の海事人材の確保につなげる。また学生など若い力の参画によって記念事業を盛り上げるとともに、若者の神戸に対する愛着を涵養する。

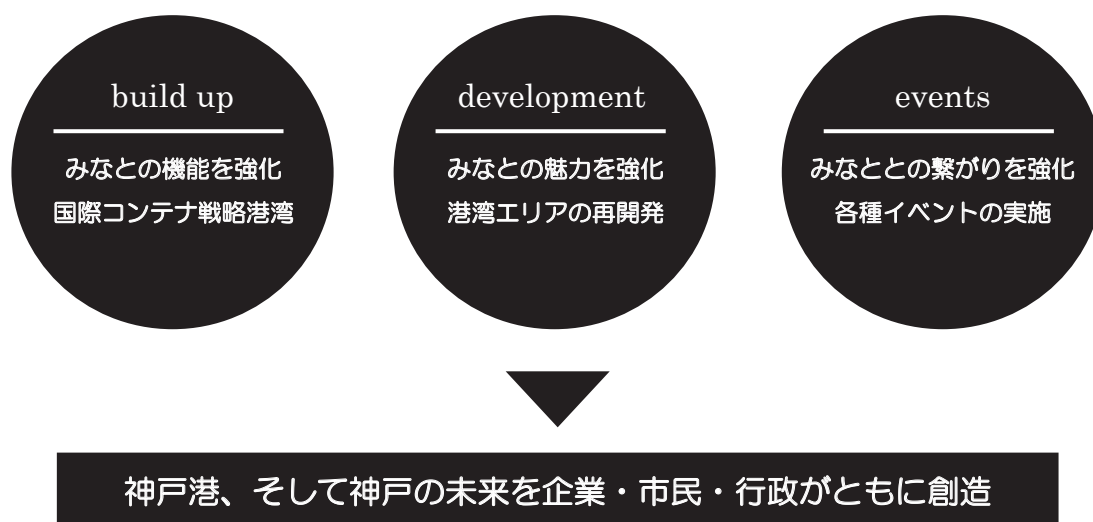


図1 神戸開港150年記念事業の全体構成

市民にとって神戸の礎である神戸港を「わたしたちのみなと」として再認識してもらい、神戸の暮らしや産業の中に「みなと」が息づいていることに気づき、市民一人ひとりが「みなと」を「自分ごと」として捉えてもらうため、また「市民みんなのみなと」であり、「私たち一人ひとりにとってのみなと」であることを意識してもらうため、神戸開港150年記念事業の統一スローガンとして、「みんなみなとKOBE」を据えました。市民各人が、みなとと自分との関係性を様々なシーンで発信していくことが、これからの神戸のまち、及び神戸港の未来をみんなで考え、取り組んでいくことに繋がっていくと考えます。



図2 神戸開港150年記念事業の統一スローガン

2. 神戸開港150年記念事業の基幹事業

(1) 神戸開港150年記念事業の基幹となる事業

神戸開港150年記念事業は、上述のとおり、企業や市民、みんなで盛り上げていくことを目指しています。このため、開港150年の前年の2016年から、企業や市民団体等が主催する関連イベントも合わせ、実に100件近いイベントを実施しました。

このうち、神戸開港150年記念事業実行委員会が主催する基幹事業は、2017年2月の「神戸国際港湾会議」、3月の「クイーン・エリザベス神戸発着クルーズ」、5月の「神戸開港150年記念式典」（記念式典の中で概ね30年後の神戸港の将来構想を発表）、7月の「海フェスタ神戸」、9月の「開港150年 こうべ食の博覧会」と、それぞれ異なる角度からのアプローチで、神戸の魅力を日本中・世界中、そして神戸市民に訴求してきました(図3参照)。

以下、こうした基幹事業のうち、主として国内外の海事関係者を中心に神戸開港150年の周知を試みた、「神戸国際港湾会議」及び「神戸開港150年記念式典」について詳述します。



図3 神戸開港150年記念事業基幹事業の系統図

（2）神戸港湾国際会議

神戸開港150年記念事業の最初の基幹事業として、2017年2月13日、14日の2日間、神戸国際会議場、神戸ポートピアホテルにて「神戸国際港湾会議」を開催しました。会議には、日本を含む世界18の国・地域から、26の港湾が参加しました（表3参照）。

神戸は1995年に発生した阪神・淡路大震災により、未曾有の被害を受け、港湾施設に甚大なダメージを被りましたが、冒頭言及したとおり、港湾関係者の方々の多大なご努力のおかげで、港湾施設は2年で復旧し、その後も国の国際コンテナ戦略港湾など集貨の取り組みを推進し、神戸港のコンテナ取扱量は震災前の水準に戻りつつあります。

しかしながら、企業が積極的に海外進出を図る中で、神戸港は、被災した港湾機能の復旧・復興に注力することとなり、積極的に海外の港と連携を図り、世界に向けて港勢拡大のための取り組みを進めることができませんでした。

神戸港にとっての今回の国際会議の開催意義は、神戸開港150年の節目の年に、このような規模の会議を主催することで、世界の各港との交流・連携を促進し、神戸港の国際的な存在感を高め、神戸港が世界で活躍するための足掛かりを作ること、また、生産拠点が東南アジア方面に移行していく情勢をにらみ、この度の国際会議にアジアの主要港の代表者を招聘することで、とりわけ東南アジア諸港との協力関係を構築し、成長著しい同地域からの今後の広域的な集貨に繋げていくこと、大きくこの2点が挙げられます。

表3 神戸国際港湾会議参加港一覧

国・地域	港名	参加港湾管理者等
中国	上海	上海港務集団（SIPG）、上海市交通委員会
	天津	天津港務集団
韓国	仁川	仁川ポートオーソリティー
	済州	済州特別自治区海事水産局
台湾	高雄	台湾国際港湾有限公司（TIPC）
	基隆	
タイ	レムチャバン	タイポートオーソリティー
	バンコク	
ベトナム	ハイフォン	ハイフォン港JSC
	ホーチミン	サイゴン港合弁会社
ミャンマー	ヤンゴン	ミャンマーポートオーソリティー
シンガポール	シンガポール	シンガポールマリタイムポートオーソリティー、シンガポールクルーズセンター
フィリピン	マニラ	フィリピンポートオーソリティー
	スービック	スービック湾メトロポリタンオーソリティー
カンボジア	シアヌークヴィル	シアヌークヴィル自治港
バングラデシュ	チッタゴン	チッタゴンポートオーソリティー
マレーシア	ポート克蘭	ポート克蘭オーソリティー
	ペナン	ペナン港SDN. BHD
インドネシア	タンジュンプリオク	ポートオブタンジュンプリオク
	タンジュンペラック	PELINDOⅢ
スリランカ	コロンボ	スリランカポートオーソリティー
アメリカ	シアトル	シアトル港湾局
オランダ	ロッテルダム	ロッテルダム港湾局
フランス	マルセイユ	マルセイユフォス
ドイツ	ハンブルク	ハンブルクポートオーソリティー
日本	神戸	神戸市

神戸国際港湾会議は、本国際会議の全体監修者である黒田勝彦神戸大学名誉教授による基調講演から始まりました。「開港150年を迎えた神戸港の歩みや課題について」と題した講演で黒田教授は、戦後、高度経済成長の中で貨物量を伸ばし、阪神・淡路大震災でアジアのハブ港としての地位が相対的に低下した神戸港の歩みを紹介し、神戸・大阪両港が東京・横浜港と比べ、欧米へ向かうコンテナ輸送便が少ない点を課題として挙げられました。また、貨物の運搬機能を持ちつつ、乗客が船内を客船のように楽しめる「クルーザーフェリー」の導入を提言し、「関西とアジアの各港でネットワークを張り巡らせようではないか」と呼びかけられました。

その後3つの分科会に分かれて、それぞれのテーマに基づき、参加各港からの報告、情報交換が行われました。また、神戸港の姉妹港・友好港であるシアトル港、ロッテルダム

港、天津港を含む6港が、ウォーターフロントの再開発をテーマとするセミナーを開催しました（表4参照）。

表4 各分科会テーマ

	テーマ	座長
分科会A	クルーズの展望	赤井 伸郎 大阪大学大学院教授
分科会B	アジア物流の展望	池田 龍彦 横浜国立大学名誉教授
分科会C	港湾管理における環境政策	デヴィッド パドマン 前ポートクラン港長
姉妹港・友好港セミナー	ウォーターフロントの再開発	安田 丑作 神戸大学名誉教授

分科会Aでは、参加各港が客船の寄港数や受け入れ態勢などを報告し、客船の大型化や寄港数の増加への対応について意見が交わされました。観光客への対応でも議論を交わし、各港が「港に長く滞在してもらうよう呼びかけ、乗客も地元の人も満足できる企画で地域の活性化に繋げたい」と議論が深まりました。

分科会Bでは、経済成長に伴う貨物量の急増にどう対応するかなどについて、アジア各国の港湾担当者らが自港の実情を報告し、意見交換がなされました。コンテナ船の大型化への対応や、積み降ろした貨物の陸上輸送の交通渋滞対策などが取り上げられ、課題の共有化がはかられました。神戸港からは、港が阪神間の市場に近いことなどを強調し、各国の港との連携強化を呼びかけました。

分科会Cでは、温室効果ガスの削減をめぐる自港の取り組みや課題について意見交換がなされました。風力や地熱発電など自然エネルギーを港湾管理に活用することや、環境に配慮した船を対象に入港料を値下げすること、内航船に燃料として液化天然ガスの利用を求めることなど、各港から環境政策への取り組みについて発表がありました。

姉妹港・友好港セミナーでは、湾岸地区の再開発の取組みについて、参加各港から発表がありました。使用されなくなった港湾施設を、公園やレジャー施設として再開発した事例などが紹介されました。

2日間にわたる会議の成果として、今後の各港間の連携や将来を担う人材育成について協力して取り組むことを確認した共同宣言、「神戸宣言」が採択されたほか（表5参照）、東南アジアの港湾管理者を中心に、11の港と神戸港との間で、航路展開の積極的な推進や海運に関する情報共有の強化、人的交流の促進といった項目についての協定を締結しました。これにより、今後の神戸港の港勢拡大に向けた協力関係を築くことができました。また、国際会議に参加した海外の港湾管理者と、神戸港で活動する物流関連企業など民間企業が情報交換を行うビジネスマッチングの場も設け、延べ23件のミーティングが行われました。



表5 神戸開港150年記念 神戸国際港湾会議 神戸宣言 全文（日本語）

前文

2017年2月13日と14日の両日、世界26の港湾から100人を越える参加者を迎え、「神戸開港150年記念神戸国際港湾会議」を神戸市において開催した。この国際会議に参加した各港湾同士で、グローバル化社会における港の未来像を構想し、その実現に向けて共に協力し合うためのプラットフォームを構築することができた。

二日間の会議を通じて、参加した各港湾の代表者である我々は、これからの港湾と都市の発展に必要な数多くの知識や経験を共有した。この共同宣言は、これらの会議の成果をもとに、ここに集結した各港湾管理者がともに力を合わせて、今後も各港湾が社会と経済の調和ある発展に寄与するために、未来志向の努力を続ける決意を示すものである。

過去から未来へ

我々は、港湾が、世界につながる玄関口として、国家レベルと国際レベルで貿易を推進し、経済発展に繋げていくために重要な役割を果たす主体であると確信している。

我々は、これからも、変化し続ける都市経済にさらなる活力を与えるとともに、都市と港湾の空間および機能をより高度化することにより、強靱かつ環境に優しくスマートな都市の創造に貢献し、すべての人々がよりよい生活を享受できるような社会を実現したいと願っている。

活力があふれる物流・人流を目指して

基幹航路とフィーダー航路への積み替えを行う港湾と、各国、各地域の物流の窓口となる港湾があり、いずれの港湾も生活必要物資やエネルギーの供給基地として重要な役割を果たしている。したがって、これらの港湾の相互協力は、今後とも、港湾の発展のみならず、国家間の共存共栄の礎であることを、我々はこの会議で確認した。

多くの文化・経済・人々の交流の拠点となる港湾

これまで主に欧米で発展を遂げてきたクルーズ産業が、いまやアジア市場に進出し、アジアの港をターンアラウンドポートとするクルーズ戦略を展開している。我々は、クルーズ客船の寄港は、その港湾や背後地に大きな経済効果をもたらすだけでなく、乗船客と現地の人々との交流を促進することから、新たな国際間の相互理解に大いに貢献するものであることを確認した。

そのうえで、我々は、複数の港湾が船社とともに、顧客満足度の向上を目指し、港湾を通じた今後の人流の一層の促進を図っていくことの重要性を確認した。

環境分野の技術革新に向けて前進する港湾

港湾は、多様な主体が活動する臨海部の空間に立地している。我々は、港湾における環境分野の先進的な取り組みの推進により、地域社会の環境保全に貢献し、地球温暖化への対応や循環型社会の形成など、広域的かつ国際的な視点で取り組みが求められる環境問題の解決に貢献する必要性を確認した。

港湾都市の持続的発展を担う臨港地区の保全・再開発

港湾都市の持続的発展のためには、市民生活と産業・経済活動の調和を考慮しつつ、臨港地区の保全・再開発を継続的に実践することが必要である。その地域の特色ある立地環境や歴史・文化資源を活かすとともに、新たな都市機能の導入、観光・集客振興に取り組むことも重要である。我々は、こうした分野の先進的事例の情報を共有するためにも、継続的に意見交換を図っていくことが必要であることを確認した。

交流を促進し新しい価値を生み出す

グローバル化社会における港湾のより良い未来のために、我々は、この会議で確認したことを、さらに発展させていく必要がある。そのために、我々は、物流・人流の促進や環境負荷の低減に貢献できる、幅広い視点で港湾の未来を拓いていく若い人材の育成について協力して取り組んでいくことを、開港150年を迎えた、この神戸の地で宣言する。

(3) 神戸開港150年記念式典

2017年5月19日、神戸ポートピアホテルにて、秋篠宮文仁親王殿下ご臨席のもと、国内外から海事関係の企業・団体をはじめ、約1,000名の出席を賜り、「神戸開港150年記念式典」を開催しました。

式典の冒頭、神戸開港150年記念事業実行委員会会長である久元喜造神戸市長が挨拶に立ち、「国際都市神戸の発展は、港で働く皆様、先人の努力によりもたらされたものであり、改めて感謝申し上げたい。神戸は開港以来、海外から様々な文化を取り入れ、進取の気風に富んだ市民性を育んできたが、この創造的な市民性を受け継ぎ、積極果敢に世界に挑戦していきたい。」と、神戸港の発展に尽力いただいた方々への感謝の意を示すとともに、神戸港が今後、海外に向かって積極的に展開する姿勢に言及しました。



秋篠宮文仁親王殿下からは、「神戸港が我が国の歴史において、果たしてきた役割や先の大戦における神戸大空襲や阪神・淡路大震災など数多くの困難に直面するたびに一丸になって、これらを克服してこられた地元の皆様のご努力に対して深く敬意を表します。神戸港が我が国の経済発展や国際交流において、より一層重要な役割を果たしていくことを心より期待いたします。」とお言葉をいただきました。

ご来賓の挨拶として、まず、久保昌三一般社団法人日本港運協会会長から、「神戸港のさらなる港勢拡大に向け、日本港運協会としても、引き続き集貨と創貨に注力し、成長著しい東南アジア地域の貨物を取り込むなど、先を見据えた港湾のあり方を具現化し、港湾都市神戸、国際都市神戸の持続的な発展に全力で支える。」との協力の言葉を、石井啓一国土交通大臣から、ビデオレターで、「神戸港が、次の150年に向け新たな一歩を踏み出し、アジア、世界のハブ港として飛躍することを祈念する。」との神戸港に対する期待の言葉をいただきました。



また、神戸開港100年から150年の50年間に、神戸港の港勢拡大や業界の発展に多大なご功績を残された先人17名を顕彰しました（表6参照）。

表6 神戸開港150年記念 港湾功労者顕彰 受賞者一覧

氏名	職歴
石野 信一	神戸商工会議所 会頭、株式会社神戸銀行 頭取
乾 豊彦	日本船主協会 阪神地区船主会 議長、乾汽船株式会社 会長
内田 勇	日本船主協会 阪神地区船主会 議長、明治海運株式会社 会長
大橋 伸一郎	神戸海運貨物取扱業組合 理事長、株式会社大森廻漕店 会長
尾崎 陸	兵庫県港運協会 会長、株式会社上組 会長
後藤 勝三	神戸海運貨物取扱業組合 理事長、株式会社後藤回漕店 会長
鮫島 茂	港湾審議会 計画部会長、国土交通省
高砂 嘉之	神戸船内荷役協会 会長、双和運輸株式会社 社長
西村 良隆	兵庫県冷蔵倉庫協会 会長、株式会社兵食 会長
服部 元三	川崎汽船株式会社 会長
牧 冬彦	神戸商工会議所 会頭、株式会社神戸製鋼所 社長
増井 正行	神戸港湾労働組合協議会 議長、神菱港運株式会社
向井 繁人	神戸港はしけ運送事業協同組合 理事長、株式会社永宝商会 社長
森本 禎二	兵庫県倉庫協会 会長、森本倉庫株式会社 会長
安原 重夫	神戸船内荷役協会 相談役、日本港運株式会社 代表取締役
吉本 恭一	神戸港沿岸荷役業会 会長、神菱港運株式会社 社長
渡邊 正二	神戸旅客船協会 会長、協同組合神戸タグ協会 副会長、早駒運輸株式会社 社長

この記念式典の中で、神戸港が持続的に成長し、世界の中で輝き続けるため、目指すべき姿として、「挑戦・進化を続けるみなと神戸」とする概ね30年後を目標とした神戸港の将来構想を発表しました。構想では、神戸港は大きくふたつの目標に向かって取り組みを進めていくとしています。

ひとつ目の目標は、神戸の発展を支える「港湾・産業」の分野で、「グローバルなサプライチェーンの中で、新たな価値を生み出す港」となることで、六甲アイランド沖に設ける人工島に新たな国際物流拠点を整備し、東南アジア－北米間の貨物を大型船に積み替える中継港とし、原材料や部品を加工して再輸出する機能も持たせ、最先端の流通・加工・製造機能が一体化した再輸出型トランシッポ拠点となる神戸港ロジスティクスターミナルの形成を目指すというものです。



ふたつ目の目標は、神戸の活力と文化を創造する「にぎわい・都市」の分野で、「ラグジュアリーな時・場・出会いで、新たな価値を生み出すみなと」を形成することで、新港突堤西地区を中心に、商業、オフィス、住宅などの複合施設やヨットハーバーを整備し、神戸都心のウォーターフロントを新たな魅力を融合させた国際集客エリアとすることを目指すというものです。

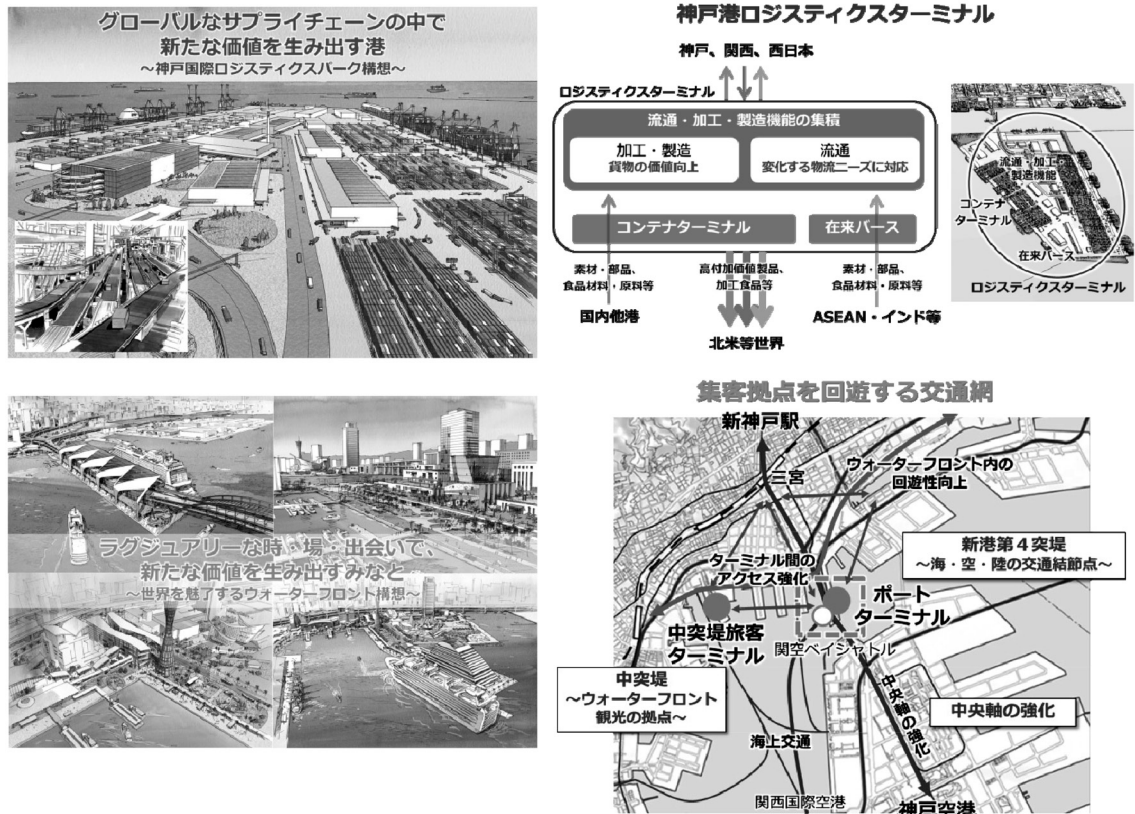


図4 神戸港の将来構想（抜粋）

式典の最後には、神戸ゆかりの著名人として、神戸の姉妹都市・姉妹港であるシアトルからビル・ゲイツ様、神戸開港150年記念事業のイメージキャラクターをつとめる戸田恵梨香様よりビデオにてお祝いの言葉を頂戴し、式典に華を添えていただきました。



3. 神戸開港150年記念事業を通じて

1年間、神戸開港150年記念事業として、様々な事業を展開してきましたが、これを単なる一過性のものとして終わらせることなく、基本方針・基本計画に謳っていることが具現化されて始めて、「神戸開港150年記念事業は成功した」と言えると考えます。

まず、海や船、港に関する催しのほか、神戸が発祥である様々な文物に焦点を当てたイベントなどにより、“みなとまち神戸”の魅力を改めて感じてもらえたかどうか。神戸市民、ないし日本全国の方々に、現代日本の生活に密着したものが神戸港からはじまったことに共感いただき、「異国情緒溢れるみなとまち神戸」に対して、これまで以上に憧憬の念を抱き、とりわけ神戸市民の方々には、自分たちの暮らす街に誇りを持ってもらえればと考えます。

次に、神戸港のウォーターフロントの再整備やウォーターフロントエリアでのイベントの実施を通じて、今後のウォーターフロントの賑わいづくりの契機とできたかどうか。神戸は都心の近くに海があるものの、繁華街である三宮・元町エリアから足を運ぶことに対し、「心理的な距離感」が少なからずあると考えます。神戸メリケンパークのリニューアルや、シティループバスのウォーターフロントゾーンでの試験運行など、神戸開港150年を機に実施したこうした取り組みが、「心理的な距離感」をやわらげられればと考えます。

そして最後に、このことが一番重要ですが、神戸開港150年記念事業として実施した“海、船、港”に触れるイベントが、次代を担う子どもたちにどう響いたか。開港150年を迎えた神戸港も、これまでたくさんの人たちの手があって、ここまで発展することができました。そしてそれは、将来にわたっても同じことが言えます。神戸開港150年記念事業に参加した多くの子どもたちの中から、将来、海や港で働く人がひとりでも多く出て、海事人材の育成・確保に繋がられればと考えます。

（執筆者は、現在、神戸市みなと総局みなと振興部振興課 開港150年担当係長）